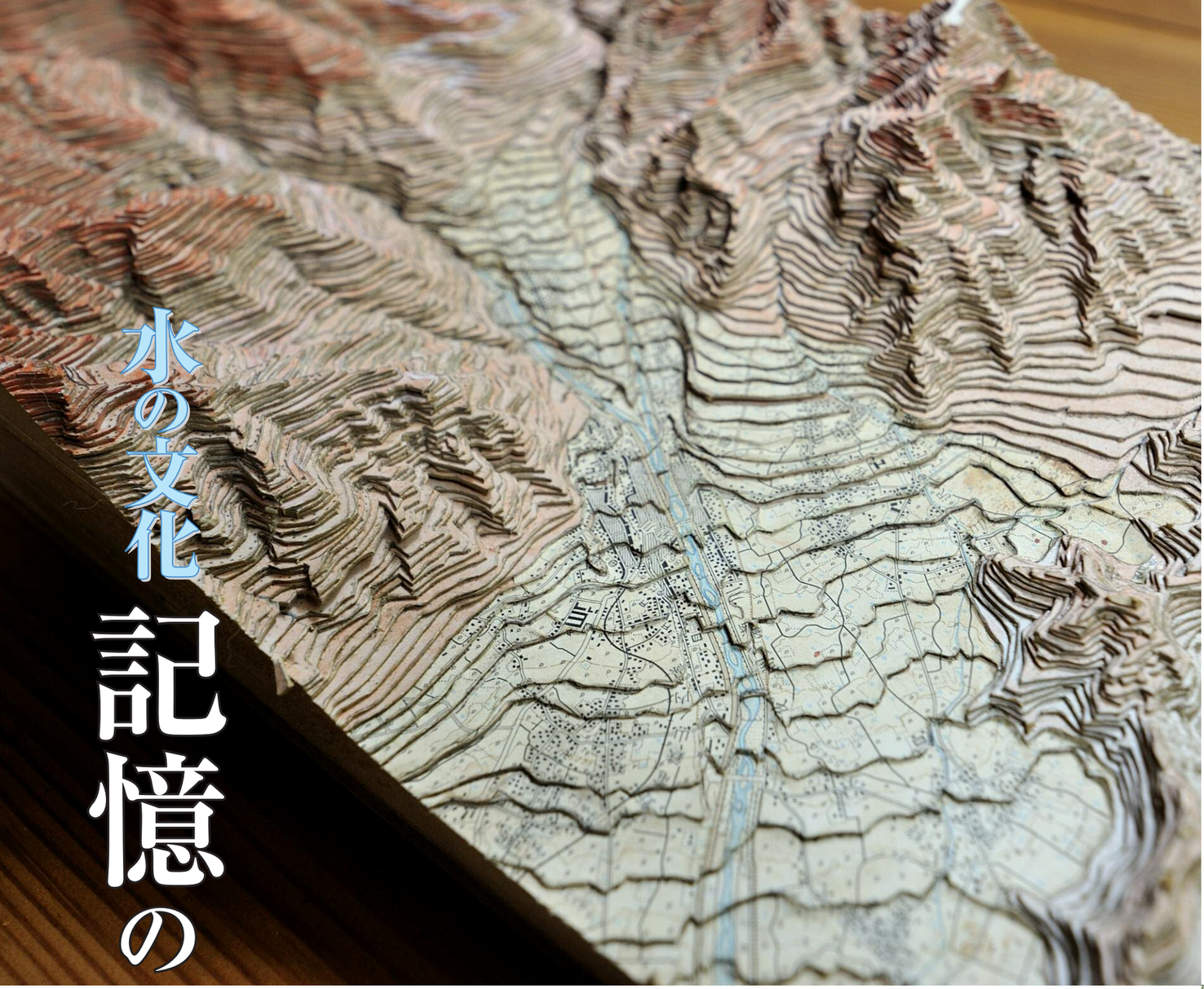


水の文化 記憶の重合（レイヤー）

水の文化楽習実践取材「地図が広げる未来の可能性」
長谷川孝治「地図で表わす世界観」
岡本耕平「ハザードマップと空間認知」
政春尋志「測量の歴史とその現場」
山下弘記「住宅地図から電子地図まで」
編集部「太田川の広島〈概説〉」
熊本隆繁・隆杉純子「四季 太田川」
石丸紀興「ヒロシマ復興の軌跡」
沖中千津留　シリーズ里川「江戸川区の水神様」
古賀邦雄　水の文化書誌「地図は河川研究の原点なり」

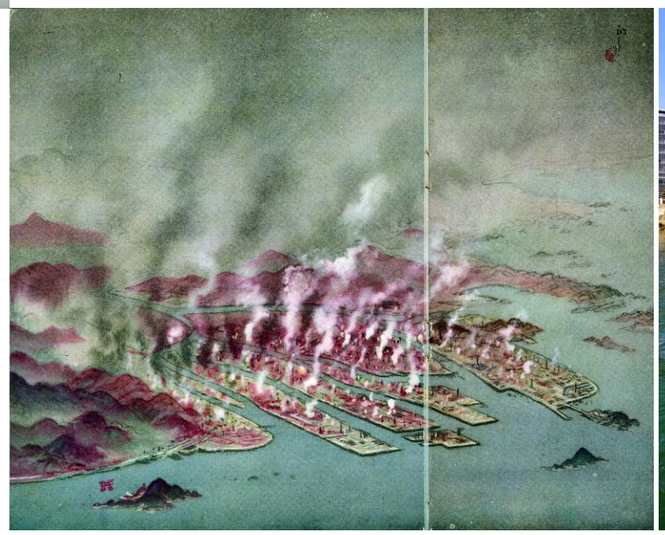
水の文化 July 2011 No. 38

ミツカン 水の文化センター

表紙上：明星（みょうじょう）学園（東京都三鷹市）に広川孝という社会科の先生がおられた。先生は、白ボール紙にカーボン紙を使って５万分の１の地図の等高線をトレースして切り抜き、積層させて立体模型をつくることを教えた。遠足に出かけるときも事前に目的地を立体模型に仕上げ、二次元の地図と並べて空間認知を促した。広川先生が亡くなられたときご自宅に残された23点の作品は、それぞれ教え子たちに形見として贈られて、大切な宝物となっている。

表紙下：自然マイスター熊本隆繁さんに太田川の支流 水内川を案内していただいた。フィールドを歩くことでつくられた、みんなの記憶が重なり合う。

裏表紙上：大きく曲流する太田川。写真提供／太田川河川事務所

裏表紙下右：水上タクシーに乗って、太田川本川（旧・太田川）から見上げた原爆ドーム。川辺に立派な雁木があるのに、初めて気づいた。広島では、川からの風景が表の顔。

裏表紙下左：吉田初三郎（1884〜1955年）は、生涯において3000点以上の鳥瞰図を作成し〈大正広重〉と呼ばれた。〈初三郎式絵図〉という独自の作風を確立したが、港湾などの軍事機密が見て取れることから軍部から活動制限を受け、不遇の時代を送る。戦後、広島の惨状を鳥瞰図にする仕事を引き受け、原爆投下後間もない広島に入り５カ月に及ぶ取材を敢行。300余名からの証言を得て、原爆八連図と呼ばれる作品を制作した。吉田初三郎研究家の益田啓一郎さんによると、初三郎はその後原因不明の重病を発症し、晩年も原爆症に似た症状があったという。英文「HIROSHIMA」原爆八連図（広島図書印刷 1949）画像提供／（C）アソシエ地図の資料館　画／吉田初三郎